

新選組と河内国御厨村の断想

— 京都守護職会津藩役知を中心として —

田 崎 公 司

はじめに

二〇〇四（平成一六）年度のNHK大河ドラマが『新選組！』（脚本／三谷幸喜、ドラマ代表作／『やっぱり猫が好き』（一九八八年）・『警部補・古畑任三郎』（一九九四年）・『王様のレストラン』（一九九五年）・『竜馬におまかせ！』（一九九六年）・『総理と呼ばないで』（一九九六年）・『HR』（二〇〇二年）他、映画代表作／『十二人の優しい日本人』（一九九一年）・『ラヂヲの時間』（一九九七年）・『みんなのいえ』（二〇〇二年）他）に決定し、現在放映中（出演／香取慎吾・沢口靖子他）である。

現在、新選組の魅力にひかれた同好の人々によるサークルの数は、おびただしい数にのぼり（同好会・同人会・友の会・個別人物のファンクラブ）、会報の発行や史跡ツアー・講演会などの活動も活発で、女性会員

（旧来からの土方歳三・沖田総司・永倉新八ファン、最近では市村鉄之助他）が多いことも特徴となっている。また、漫画家・和月伸宏の『るろうに剣心—明治剣客浪漫譚—』（全二八巻他、集英社、一九九四～二〇〇二年）による斎藤一（藤田五郎）ブームや直木賞作家・浅田次郎『壬生義士伝』（『週刊文春』一九九八～二〇〇〇年、のち「文春文庫」上・下、二〇〇二年に収録）の吉村貫一郎ブームもこの新選組人気を促進しているといえよう。さらに、井上源三郎等の再評価も始まっている。

しかし四〇年程前まで新選組の評価は、明治維新を拒む悪逆非道の限りを尽くす徳川幕府の走狗（人斬り集団・テロリスト）であり、維新の志士たちの憎まれ役（敵役）でもあった。これについては、例えば大佛次郎『鞍馬天狗』（全四七作、「鬼面の老女」『ポケット』一九二四年）、「地獄太平記」『河北新報』一九六五年）・映画『角兵獅子』（代表作として、

松竹映画、一九五一年、監督／大曾根辰夫、出演／嵐寛寿郎・美空ひばり・山田五十鈴他）等での新選組の役割をみれば明らかである。¹⁾ このネガティブな評価を一新したのが、東大阪市が誇る国民的作家・故司馬遼太郎氏による『新選組血風録』（『小説中央公論』一九六二～一九六四年、のち「角川文庫」一九六九年・「中公文庫」一九七五年に収録）・『燃えよ剣』（『週刊文春』一九六二～一九六四年、のち「新潮文庫」上・下、一九七二年に収録）の発表であった。この作品の中で司馬は、動乱期に命をかけて、まっすぐに生き抜く人々の生涯を描き、新選組の再評価とブームが到来した。マンガの神様と呼ばれる故手塚治虫氏までもが、このブームに乗って『新選組』（『少年ブックス』一九六三年、のち「集英社文庫」一九九五年に収録）を発表し、失敗している。

翻って、現在も新選組ブームである。新選組に関する書物が所狭しと並べられると共に、鶴巻孝雄・松浦玲・宮地正人諸氏に代表される歴史学からの本格的な研究も現れている。また本稿の視点の一つである幕末京都守護職としての会津藩の役割については家近良樹・白石烈²⁾ 両氏の研究があげられ、また同藩と新選組については星亮一氏³⁾ が精力的に著作を発表している。

本稿は、大阪府東大阪市小阪・御厨地区に所在する大阪商業大学経済学部で筆者が担当している日本経済史のアプローチから、在野の新選組研究者の情熱的ともいえる成果をも参照しつつ、京都守護職・会津藩主松平肥後守容保役知（役地）として河内国若江郡御厨村の歴史、ひいては新選組の活動資金供給地としての御厨（台所）について言及

するものである。

一、幕末期の会津藩財政

藩祖・保科正之が江戸幕府二代将軍・徳川秀忠の庶子（三代将軍家光実弟・四代将軍家綱補佐役）である御家門・会津藩は、将軍家の藩屏に徹することにより、寛政の藩政改革ののち慶応期にまで、財政的には預地の増石と返還と替地と猫の目のように変転させられると共に、政治的には、①文化五年（一八〇八）の蝦夷地警備、②文化七年（一八一〇）から文政三年（一八二〇）までの三浦半島警備、③弘化四年（一八四七）から嘉永六（一八五三）までの房総警備、④嘉永六年（一八五三）から安政六年（一八五九）までの品川第二御台場警備（その間に安政の大地震による藩邸と御台場の壊滅的被害がある）、⑤安政六年（一八五九）から戊辰戦争勃発までの蝦夷地再警備、⑥文久二年（一八六二）から慶応三年（一八六七）までの京都守護職就任（その間に陸軍総裁職就任）により、破綻的状况に瀕していた。⁴⁾ これを補填するべく幕府から与えられる役代地には限界があるため、財政の補填は勢い藩内外の有力村役人や富裕な商人からの献金に依存するようになっていったのである。⁵⁾ この点は、幕末期の大坂商人と会津藩の関係を考える場合も、重要な問題である。

まず、会津藩の増石と返還・替地の変遷について、庄司吉之助氏と真水淳氏の先行研究を援用しつつ、外観してみよう【表1】。越後国魚沼郡小千谷陣屋及び小出陣屋支配地と陸奥国御蔵入地は、保科正之の会津入封より、預所と藩領化を繰り返してきた。幕末期の海防との

【表1】 幕末会津藩財政関係年表

年 月	主 要 項 目
寛政10年(1798) 6月	越後国内預地5,000石増石
文政3年(1820) 4月	相模国領地返還・陸奥国越後国内領地旧復
文政6年(1823) 9月	陸奥国内預地1万石増石・合計13万9,000石
文政11年(1828) 1月	陸奥国信夫郡内預地3,000石返還・越後国蒲原郡3,000石増石さらに3,600石増石・越後国魚沼郡内3,900石を以てす
天保4年(1833) 8月	越後国魚沼郡内預地200石と300石増石12月凶作領内減収28石
天保5年(1834) 3月	越後国魚沼郡内預地300石返還
天保6年(1835) 12月	収米22万9,000俵<ママ>返還
天保7年(1836) 12月	陸奥国大沼郡内預地5万5,000石返還・収米27万2,000石返還
天保9年(1838)	収米21万5,000石返還
天保12年(1841)	収米8万2,000石返還
弘化2年(1845) 4月	民力衰え貸米4万7,000俵<ママ>・10万6,000両棄捐
弘化3年(1846) 7月	陸奥国下野国内預地5万6,000石・越後国内預地1万石余収石 越後国内預地6,000石増石
弘化4年(1847) 2月	幕府より房総警備費1万両・房総三国内1万5,000石 陸奥国内預地1万3,000石増石・越後国内預地1万3,000石収石
嘉永3年(1850) 2月	上総国6,500石増石・陸奥国内預地9,100増石 越後国内預地9,000石収石
万延元年(1860) 10月	陸奥国安房国内上知、越後国蒲原・岩船・三島・魚沼4郡内代地
文久2年(1862) 5月	京都守護職就任・役料5万石及び3万両貸与
文久3年(1863) 4月	幕命により毎年蔵米2万俵の代金給与 9月5万両の下賜(内2万両は追って相渡し)
文久4年(1864) 2月	鎮撫の功により5万石増封・軍事総裁就任 近江国内役知1万5,000石増石・和泉国内役知1万石増石 越後国内役知2万5,000石増石
元治元年(1864)	陸奥国南山御蔵入領5万石増封
慶応元年(1865) 3月	越後国蒲原郡内2万5,000石増封、河内国播磨国6,900石増封

備考；飯沼関弥編『会津松平家譜』(1938年)により、庄司吉之助『京都守護職と会津藩財政』(歴史春秋社、1981年、90頁)を訂正した上で、作成した。

関係からは、文化五年(一八〇八)の蝦夷地警備と文化七年の三浦半島警備から、この動きは加速する。その間に天保四年(一八三三)の飢饉を何とか切り抜けたのちも、房総半島警備・第二御台場警備・蝦夷地再警備は、安政二年(一八五五)一〇月の江戸藩邸の壊滅的打撃を被ることにより、勢い会津藩財政を圧縮して行った。「薪を背負いて火中に入る如し」(西郷頼母)と称された文久二年(一八六二)の京都守護職就任上洛は、その後の会津藩の悲劇の始まりでもある。

京都守護職としての役料は、文久三年の大米穀産地としての越後国内の役知(これには新潟開港という将来性が付与される)と共に京都近郊の近江・河内・和泉三国の役知と慶応元年(一八六五)の河内・播磨二国の役知によって賄われたとされる。

文久四年段階の役知財政を【表2】によって検討してみると、畿内三国役知からの年貢分は三万二五八三俵余で、金に換算すると五五八八両、他に金納分七八〇三両があり、小計Aで一萬三三九一両となる。続いて会津藩預所であ

【表2】 京都守護職1カ年入用米金と所要額

文久4年(1864)5月29日

山城国・河内国・近江国物成高	
米	16,291石9斗余、俵換算3万2,583俵4斗(5斗入)
銀	447貫目、金換算5,588両(1両に銀80目)
計	米入方引残8,583俵4斗、代7,803両(1両に5斗8升值見込)
二口	1万3,291両
5万石加増高	
米	3万2,583俵4斗、比金2万9,621両
金	5,588両、近江国分物成予定(前出)
会津大沼両郡5万石役知	
金	3万5,209両(予定)
米代	1万2,900両年々2万俵ずつで後の米代金
京都用	9万6,709両京都御入方に差向分
勤向用	21万6,000両京都勤向・番人・年中諸雑費
向入方	9万709両
差引高	11万9,291両12ヵ月月割約9,940両に当たる

出典：日本史籍協会編『會津藩廳記録四』（日本史籍協会叢書4、1918年、「復刻版」東京大学出版会、1982年、577～580頁）より作成。

【表3】 幕末会津藩越後国領有状況

(単位/石・村)

郡名	藩領		預所	
	石	高	石	高
岩船	13,191.579	(59)	—	(0)
北蒲原	14,576.162	(85)	—	(0)
中蒲原	4,172.472	(11)	—	(0)
西蒲原	7,967.916	(39)	—	(0)
南蒲原	1,992.017	(10)	—	(0)
東蒲原	19,330.095	(76)	—	(0)
三島	4,486.126	(17)	—	(0)
北魚沼	12,295.965	(85)	12,257.424	(36)
南魚沼	12,283.471	(72)	8,181.151	(35)
中魚沼	—	(0)	3,124.455	(8)
計	90,295.801	(454)	23,563.030	(79)

出典：『旧高旧領取調帳』（国立歴史民俗博物館データベース）より作成。

備考：合未満は四捨五入。()内は村数。

【表5】 慶応元年の会津藩加増地

(単位/石・村)

旧領主	国名	郡名	石高
多羅尾主膳支配地	近江	栗太・蒲生・野洲	4,292.825
石原清一郎支配地	和泉	大島・日根・南	20,215.108
岡部筑前守預地	和泉	大島・日根・南	1,117.643
松平越中守預地 (桑名藩預地)	越後	蒲原	3,030.500
大草太郎左衛門支配所 (出雲崎・脇野町代官所)	越後	蒲原・三島	13,835.467
里見源左衛門支配所 (水原代官所)	越後	蒲原・岩船	8,144.410
合計 6ヵ所	4ヵ国	9ヵ郡	50,635.953

出典：『福岡郡中高用留』（立教大学図書館蔵）より作成。

備考：合未満は四捨五入。

【表4】幕末期会津藩役知河内国村落一覧

番号	旧国名	旧郡名	旧村名	現市町村名	石高
1	河内国	河内郡	池嶋	東大坂市	1,104.099976
2	河内国	河内郡	喜里川	東大坂市	249.664001
3	河内国	河内郡	客坊	東大坂市	200.248993
4	河内国	河内郡	河内屋南新田	東大坂市	133.759003
5	河内国	河内郡	中新開	東大坂市	218.317001
6	河内国	河内郡	今米	東大坂市	280.915009
7	河内国	河内郡	川中新田	東大坂市	386.450012
8	河内国	河内郡	吉原 〔栗原神社除地無高〕	東大坂市	275.194000 42坪余
河内郡8カ村小計					2,848.647995
9	河内国	讚良郡	深野新田 〔泉涌寺領〕	大東市	1,091.683960 309.35908
10	河内国	讚良郡	深野北新田 〔菅原社除地無高〕	大東市	653.893982 24坪
11	河内国	讚良郡	深野南新田	大東市	695.879028
12	河内国	讚良郡	上田原	四條畷市	273.382996
13	河内国	讚良郡	下田原	四條畷市	325.875000
14	河内国	讚良郡	岡山 〔津鉢社除地無高〕 〔下ノ宮除地無高〕 〔大正寺除地無高〕	四條畷市	476.404999 710坪 1430坪 300坪
15	河内国	讚良郡	小路 〔加藤勝兵衛知行地〕	寝屋川市	208.800003 100.0000
16	河内国	讚良郡	砂 〔馬守社除地無高〕	四條畷市	561.401978 182坪余
17	河内国	讚良郡	堀溝 〔鶯関社除地無高〕 〔大念寺除地無高〕	寝屋川市	223.104996 216坪 48坪
18	河内国	讚良郡	太秦 〔熱田社除地無高〕	寝屋川市	333.696991 2262坪
19	河内国	讚良郡	秦	寝屋川市	304.537994
讚良郡11カ村小計					5,148.661927
20	河内国	交野郡	中宮	枚方市	1,034.908813
21	河内国	交野郡	宇山	枚方市	212.800995
22	河内国	交野郡	養父	枚方市	398.458008
23	河内国	交野郡	村野	枚方市	1,034.151001
24	河内国	交野郡	私市	交野市	160.619995
25	河内国	交野郡	傍示	交野市	39.549999
交野郡6カ村小計					2,880.488811
26	河内国	若江郡	箕輪新田	東大坂市	118.135002
27	河内国	若江郡	箕輪	東大坂市	150.643005
28	河内国	若江郡	御厨 〔天神社除地無高〕 〔西楽寺除地無高〕	東大坂市	1,214.678955 348坪 69坪
29	河内国	若江郡	菱屋中新田	東大坂市	150.643005
30	河内国	若江郡	加納 〔宇波神社除地無高〕 〔称名寺除地無高〕 〔願行寺除地無高〕 〔仏名寺除地無高〕	東大坂市	1,735.416016 512坪 47坪 28坪 41坪
31	河内国	若江郡	稲葉 〔稲葉神社除地無高〕	東大坂市	553.926025 380坪
若江郡6カ村小計					3,923.468009
河内国31カ村小計					14,801.266742

出典：『旧高旧領取調帳』（国立歴史民俗博物館データベース）より作成。

作成協力；木瀬遼子氏（大阪商業大学総合経営学部卒業生・元田崎研究室アシスタント）。

る〔南〕会津郡・大沼郡内役知からは、米納入分が一万二九〇〇両、金納分が三万五二〇九両あり、小計Bは四万八一〇九両になる。すなわちAとBの合計は、六万一一五〇〇両にのぼる。会津藩勤向用は二万一六〇〇両にすぎないが、京都入用分が九万六七〇九両であり、京都分を差し引いても藩入用が一一万九二九一両に上り、これを月割にすると九九四〇両を必要とすることが計上されている。京都守護職の勤務は、会津藩財政そのものを賭すものとして、運営されたのである。

この間の役知の変遷については、現行の自治体史でも記述が錯綜し混乱を極めている。これは何よりも一次史料に依拠しなかった問題によるものである。とりあえず、『旧高旧領取調帳』で、越後国〔表3〕の会津藩領・預地（預所・役知をあげてみると、越後国は岩船郡外九カ郡四五四カ村で、計九万二九五石八斗一合の藩領の他に、北魚沼郡外二カ郡七九カ村で二万三五六石三升の預所が存在していた。そもそも、越後の預所が京都守護職役知として存在していたのか、旧来からの慣行だったのかは判然としない。そして、この時点では蒲原郡や魚沼郡は郡分割されておらず、この取調べが後世のものであることが一目瞭然である。やはり一次史料の検討が必要である。

二、京都守護職会津藩役知河内国三一カ村

そこで本節では、明らかに京都守護職役知としての役割を付与された畿内地域〔表4〕を掲げてみると、河内国河内郡八カ村の二八四八石六斗四升八合余、同国讃良郡一カ村の五一四八石六斗六升二合余、

同国交野郡六カ村の二八八〇石四斗八升九合余、同国若江郡六カ村の三九二石四斗六升八合余、合計三一カ村の一万四八〇一石二斗六升七合余のみが記載されていた。この中には、本稿の対象である御厨村が一二一四石六斗七升九合余の大村として記載されている。

本来記載があつてしかるべきの近江・和泉の二国内役知の記載は、全く見当たらない。しかし、〔表5〕の越後国福岡代官所支配地の『御留』では、逆に河内国内役知の記載が見当たらないのである。そこで、近年、発見された『幕末会津藩往復文書』に記載された一次史料の記載を左記に掲げてみよう。

「御役知五万石之内、壹万石九千石余ハ江州蒲生神崎郡之内ニ而御渡相成寄之処、此度河内播磨之内へ御振替之御吟味有之、右兩國之内村々御内調内密相伺別紙ニ申上候、右ハ未だ取調ニ而少々人狂ひハ可有之旨被中間候所先以御参考旁申上候以上

〔慶応元年〕三月廿九日 田口治八

河内国

讃良郡 深野新田 秦村 深野北新田

河内郡 客坊村 喜田川村 川中新田 池嶋村 今米村 中新田

額田村

河内屋南新田 吉原村

若江郡 稲葉村 菱屋中新田 箕輪新田 箕輪村 加納村 御厨

村

播磨国

美囊郡 高篠新田 東中村 志殿村 桃坂村 蓮華寺 吉兆寺

西山村

長谷村 脇川村 宮村 仲村新田 小屋寺 野呂谷新田

武士山新田

山口新田 奈良井村

加東郡 嶋村 万勝村 新畑村新田 山田村新田 栗生村

加東郡 青野新田

河西郡 玉野新家村 桑原田村 五領新田 朝染村 朝妻村 豊

倉村 鶴野新家村

下宮木村 玉野村 野条村 朝妻村新田 西笠原村 太

村 東長村 中野村

篠倉村 戸田井村 東南村 西南村 琵琶甲村 河原村

池上村 西野々村

満久村 嶋波多

六拾五ヶ村

高合巻万九千四百石余

此物成凡

米六千九百石余^⑬

ここでの記載も【表4・5】の記述と大きく食い違い、河内国は一八カ村が書上げられるだけで、三一カ村との差は大きすぎる。また従来の研究では、述べられなかった播磨国美囊郡外二郡四七カ村が記載

されている。これは記載の間違いであるというよりも、役知の目まぐるしい変遷に問題がありそうである。その中で、御厨村を含む若江郡内役知は『旧高田領取調帳』の記載と『幕末会津藩往復文書』の記載が完全に一致する役知であるといえよう。

三、河内国若江郡御厨村小史

大阪商業大学の所在地は、大阪府東大阪市御厨栄町四丁目一番地一〇号であり、江戸時代は河内国若江郡下小坂村と御厨村に相当する地域にキャンパスが広がっているが、敷地の大部分は旧御厨村に所在している。そこで本節では、河内国若江郡御厨村の簡単な歴史について触れてみよう。^⑭

御厨の地名が初めて史書に現れるのは、『延喜式』第三十九の内膳司の条においてであり、「河内国江厨所進」として、「造雑魚鮓十石味塩魚六斗」との記載がある。御厨の地名は、朝廷や撰関家が伊勢神宮への供物貢進のための食糧庫（干魚・穀物）を意味するといわれるが、『新撰姓氏録』の「河内国皇別」に「江首（江人附）彦八并耳命七世孫来目津彦大雨宿禰大碓命之後也」と記述されていることにより、古代において豪族江首が居住していたと考えられる古くからの土地であり、中世にかけて大江御厨の重要な地域だったのである。これは、『延喜式』「神名帳」に記される「若江郡廿二座」の内の一つである意支部神社の存在からも裏付けされると思われ、同社は御厨天神に比されている。

続いて戦国時代になると、新たな展開がみられる。本願寺証如の『天文日記』（天文八年（一五三九）八月五日の条）に「斎を南町屋御厨屋次郎左衛門為親之志調之」とある御厨屋次郎左衛門は御厨村出身の商人だといわれ、彼の同族だと思われる御厨五郎左衛門は、石山本願寺（現、大阪城の地）勢力の中心的人物であった。ここに御厨村が商業地として大きな力を有し、浄土真宗（一向宗）の重要な拠点であったであろうことも想像に難くない。

近世の御厨村は、慶長九年（一六〇四）の検地で石高九七八石余、『正保郷帳』（二六四四〜一六四八年）の写とみられる『河内国一国村高控帳』では石高九七八石余で、一貫して幕府領（旗本領）であり、小物成として蓮年貢銀五六匁・葭年貢銀二四七六匁五分が書き上げられている。続いて元禄六年（一六九三）で二〇六九石余、元文二年（一七三三）の『河内国高帳』では二二四石余・反別一〇町二分・分米一二九石の新田があった。さらに天保五年（一八三四）の『天保郷帳』で二二五石余、明治元年（一八六八）時点の調査とされる『旧高旧領取調帳』では、先にみたように二二四石余である。年貢率は延享年間から文政初年（一八一八）では、ほぼ三〜四割台、文政初年から天保末年（一八四四）には、ほぼ二割台、天保末年以降は、ほぼ二〜三割台であったとされる。家数・人数の方は、安永元年（一七七二）八七軒・三七五人、文政一一年（一八二八）八七軒・三七五人（男一九四人・女一八一人）、天保七年（一八三六）八八軒・四〇三人（男二〇二人・女二〇一人）、弘化三年（一八四六）八一軒・三八三人（男一九五人・女一八八人）であ

る。

明暦年間（一六五五〜一六五八）に暗峠越奈良街道（同時に伊勢参詣街道）の宿駅として、松原宿が設置され、交通量が増加すると、天明三年（一七八三）には吉田村等と共に助郷村に指定され、御用人馬・諸入用銀等の四分六厘を負担した。村内には楠根川筋剣先船の船着場があり、在郷剣先船一艘を所有する者がいた。また『五畿内志』によれば、村中に橋が架かっていた。なお御厨村は天保年間に、象五郎と勘左衛門の二名の庄屋が存在しており、幕末期には勘左衛門の子孫である加藤家が勤務する大村でもあった。嘉永七年（一八五四）一月四・五日には地震が起こり、民家の倒壊九、半壊が村半数余、残りも半壊の被害を受けたと伝えられる。

なお御厨村の産土神としては、前述した天神社（御厨天神）があり、寺としては浄土真宗本願寺派華月山西楽寺・浄土真宗大谷派鳳凰山法観寺・融通念仏宗称名山念仏寺があげられる。

四、新選組隊士 松本喜次郎

続いて本節では、新選組の活動と大阪との間の深い絆について言及してみよう。周知のように文久二年（一八六二）に京都における尊王攘夷を旗印とするテロリズムの頻発を押さえるために奥州会津藩（現在の福島県西部地域）藩主松平肥後守容保が京都守護職に就任する。この背景には、攘夷派の実力行動に対して治安機能を喪失した大坂町奉行・京都町奉行・京都所司代等の無能ぶりがあったとされる。

前々節で検討したように、役知（給料）として、御厨村他三〇カ村（計二万五〇〇石弱）が京都守護職松平肥後守容保知行地となる。また大坂の大豪商（鴻池屋他）が会津藩御用を任される。文久三年八月一日日政変が勃発すると会津藩実動部隊として、「新撰組」が正式に誕生する。会津藩御預新選組の給与は、京都守護職役知御厨村他三〇カ村の年貢の流用と大坂の大豪商の献金によって賄われる。

御厨村は大坂都市近郊型食糧供給地および商品作物生産地（棉作他）として存在していたのだが、何よりも宝永元年（一七〇四）以降の大和川付替えによる新田開発によって生産高・生産内容・土地生産性が一挙に上昇する。大和川付替え後に、御厨村左側を流れていた楠根川川床に菱屋中新田（やはり幕末期会津藩役知となる）が開発されるが、新田開発者は江戸の大商人で京・大坂にも店をかまえていた菱屋岩之助・庄左衛門親子である。司馬遼太郎氏が『新選組血風録』「芹沢鴨の暗殺」の中でお梅の檀那である四条堀川呉服商・菱屋太兵衛を登場させたのは、この菱屋岩之助親子が念頭にあったのかもしれない。

大坂における新選組の活動としては、慶応元年（一八六八）潤五月三日より、一四代將軍徳川家茂の上洛と下坂に備え、京橋の両詰に設けられた検問所の北詰で取り締まり任務につき、天満橋南八軒屋の船宿・京屋忠兵衛方が定宿となると共に活動拠点ともなった。また同年五月頃には上本町の下寺町にある万福寺が大阪警護の宿舍となり、以後、活動拠点の一つとなる。この屯所には二〇名前後の新選組隊士が常駐し、境内の有栖川宮一品親位牌堂を壊したり、納屋を牢屋に改造

したりしていた。同年五月二十六日には、長州系の志士と接触があると共に尊王攘夷派の志士から命を狙われていた儒者・藤井藍田を捕縛し、厳しい詮議を加えた。体が弱かった藤井は万福寺内牢屋で獄死している。ちなみに万福寺屯所に一番近い京都守護職役知が御厨村であった。金策に窮した新選組隊士が鴻池屋や平野屋のみならず、役知である御厨村を無心に訪れた可能性は充分にある。

翻って、河内平野の新田開発で大量に生産された棉花・綿糸は、和泉国貝塚・岸和田の綿織物に姿を変える。すなわち河泉地域間取引が成立していたのだが、和泉国・岡部家五万五千石の岸和田藩から新選組隊士になった者がいる。松本喜次郎（喜一郎・喜治郎・喜四郎とも表記される）〔弘化三年（一八四六）〜慶応四年（一八六八）〕がその人である。^⑤

大阪出身の新選組隊士としては、他に久米部正親・伊木八郎・辛島昇司・佐々木愛次郎・矢金繁三等があげられるが、ここでは松本喜次郎の活躍を永倉新八『新撰組顛末記』（新人物往来社、一九七一年）よりピックアップしてみたい。まず松本は土方歳三隊として元治元年（一八六四）六月四日の池田屋事件に出勤し、京都守護職松平容保から恩賞金十両・別段金五両を下賜されている。この年の八月四日には、播磨国加古郡高砂村（現、兵庫県高砂市）出身の河谷耆三郎（儀三郎）と共に摂津国嶋上郡高浜村（現、大阪府高槻市）に行き、長州藩と同村庄屋半右衛門や村民との関係を尋問している。松本が隣国和泉出身ということで、農村派遣に任用されたのである。『行軍録』によれば新選組三

番隊（隊長は齋藤一）に配属され、脱走隊士・柴田彦三郎を追跡している。伊東甲子太郎派との分裂の原因となった幕臣取立てでは平士として見回し並御雇となる。

慶応四年（一八六八）一月の鳥羽・伏見の敗戦ののちに江戸へ帰還し、近藤勇と共に甲斐国勝沼の戦いに参戦、のち近藤勇と対立した永倉新八・原田左之助等と靖共隊を結成し、江戸城和田倉門の旧会津藩上屋敷を屯所としている。靖共隊は幕府陸軍奉行の松平太郎より、旧幕府諸隊の一つとして公認されると共に、松本は歩兵取締になる。のち新選組に復帰し、宇都宮に転戦、土方歳三・齋藤一らと会津戦争に参戦した。旧靖共隊士は下野国藤原方面で会津藩境の守備に当たり、松本は猪苗代城にあった幕府歩兵奉行大島圭介のもとへ伝令に赴く往路または復路で負傷し、白河街道三代宿でもある会津藩福良組三代村（現、郡山市湖南町）で同年八月一七日に享年二三歳で死去した。墓は同地の正福寺にある。旧靖共隊の永倉新八は、靖共隊反対派であった土方歳三に斬首されたと憤激しているが、真相は定かではない。会津三代の地で斃れた松本喜次郎と会津野沢出身である筆者との間にはささやかながら縁が存在するのである。

むすびにかえて — 幕末Ⅱ平成というキーワード —

現代は幕末状況であるといわれる。今まで絶対的であると思われることが、音を立てて崩れて行く。野口武彦『幕末気分』（講談社、二〇〇二年）や同『幕末伝説』（講談社、二〇〇三年）をあげるまでもなく、

公人たる政治家・官僚・経済人、そして一般の庶民までもが、なりふり構わず「利殖にふけり」・「奸計で人を陥れ」・「腐敗し」・「弱いものをいじめ」、私利に走る。これは時代の末期的症状であり、幕末はそういう時代であったといわれ、平成の現代も同様であるといえる。そうであるからこそ、混迷を極めた幕末維新の人物の生き方が、現代において再評価されるといえよう。従来の価値観や世界観が崩壊する現代だからこそ自分自身を鍛えて、納得できる人生を生き抜く知恵が必要になってくる。それには実学と将来を展望する理論の学習、そして、その結合が何よりも急務となってくると思われる。

本稿で言及したように、新選組の活動を資金面で支えた地域の一つは、大阪商業大学が所在する御厨の地であった。御厨は、新選組の「御厨」（台所）としての位置づけをもったのである。私たち大阪商業大学の教職員・学生は、京都守護職・会津藩主松平肥後守容保と新選組との関わりがある御厨の地で、研究と教育の日々を過ごしていると見える。そして私たちは、これからの時代を生きる力と知恵とを一生懸命に大阪商業大学で学び、探求し、そして実践しようとしている。動乱期激動期に自分自身の可能性をフルに信じて一生懸命に生き抜いて行くことが、司馬遼太郎氏が注目した新選組の群像であったとするならば、私たちは新選組の生き方に、時には（もちろん悲劇として終焉するのではなく）注目しても良いのかもしれない。

- (1) 川西政明『鞍馬天狗』(岩波新書、二〇〇三年)を参照のこと。
- (2) 鶴巻孝雄「(国家の語り)と(情報)―地域指導層の国家・社会意識と諸活動をめぐって―」(新井勝紘編『民衆運動史4近世から近代へ―近代移行期の民衆像』青木書店、二〇〇〇年)、同「多摩にもたらされた新選組情報―近藤勇書簡を読む―」『歴史読本』第七七二号、二〇〇四年三月。
- (3) 松浦玲『新選組』(岩波新書、二〇〇三年)。
- (4) 宮地正人『歴史のなかの新選組』(岩波書店、二〇〇四年)。
- (5) 家近良樹『幕末政治と討幕運動』(吉川弘文館、一九九五年)、同『稽微録―京都守護職時代の会津藩史料―』(思文閣出版、一九九九年)、同『孝明天皇と』(会桑)―幕末・維新の新視点―(文春新書、二〇〇二年)。
- (6) 白石烈『公武合体』をめぐる会津藩の政治活動』(広島大学『史学研究』第二三五号、二〇〇二年一月)、同『諸藩周旋方と新選組』(『歴史読本』第七七二号、二〇〇四年三月)を参照のこと。
- (7) 星亮一『幕末の会津藩―運命を決めた上洛―』(中公新書、二〇〇一年)、同『会津藩はなぜ「朝敵」か―幕末維新最大の謎―』(ベスト新書、二〇〇二年)、同『新選組と会津藩―彼らは幕末・維新をどう戦い抜いたか―』(平凡社新書、二〇〇四年)。
- (8) 数多出版されている新選組関係の書物の中でも、『別冊歴史読本 新選組原論』(新人物往来社、二〇〇一年)、『別冊歴史読本 新選組を歩く―士道に殉じた男たちの軌跡―』(新人物往来社、二〇〇三年)、『別冊歴史読本 新選組 大全史 新選組クロナクル(通史篇)』(新人物往来社、二〇〇三年)、『別冊歴史読本 超読本 新選組クロナクル(入門篇)』(新人物往来社、二〇〇三年)、前掲の鶴巻・白石論文が収録されている『特集 近藤・土方・沖田の新選組』(『歴史読本』第七七二号、二〇〇四年三月)を本稿では特に参照した。
- (9) 庄司吉之助『京都守護職と会津藩財政』(歴史春秋社、一九八一年)、拙稿「会津戦争と地域編成―戊辰戦争・世直し―揆・直轄統治―」(明治維新史学会編『明治維新の地域と民衆』吉川弘文館、一九九六年)を参照のこと。
- (10) 「嘉永七年 武備入用献納金別賞格之通達」『旧記八』福島県西会津町・旧野沢組郷頭職長谷川俊三家文書。
- (11) 前掲 庄司吉之助『京都守護職と会津藩財政』(八九〜一〇七頁)。
- (12) 真水淳「幕末期越後の会津藩領」『新潟県史研究』(第一五号、一九八

- 四年三月)、同「幕末の越後における会津藩領について」『増補 会津と越後を語る』(新潟郷土史研究会、一九八四年)。
- (13) 『幕末会津藩往復文書 下巻』(会津若松市史・史料編Ⅱ、二〇〇〇年、二八二〜二八四頁)。
- (14) この節の記述は、『布施市史』(第一巻、一九六二年)及び『布施市史』(第二巻、一九六七年)、その記述を受けた角川日本地名大辞典27『大阪府』(角川書店、一九八三年、一三三〜一三六頁)、日本歴史地名体系28『大阪府の地名』(平凡社、一九八六年、九七九頁)を参照した。
- (15) 拙稿「新選組の御厨」『Tohoku』(vol.3、二〇〇四年上半期号、U・コミュニティホテル)。
- (16) 古賀茂作・鈴木亨編著『新選組 全隊士録』(講談社、二〇〇三年)、前田政記『新選組全隊士徹底ガイド』(河出書房新社、二〇〇四年) 他を参照のこと。

【付記】

本稿は、筆者が担当した「新選組」の経済史的背景―幕末維新期の地域社会―(於/DAISHDAL Open Campus 2003、二〇〇三年八月二四日)でのミニ講義「新選組!」と私たちの時代―日本経済史のアプローチから―(於/岸和田市立産業高等学校、二〇〇四年二月二〇日)での模擬授業及び前掲「新選組の御厨」の寄稿文が、執筆の動機となっている。高校生向けの講義と一般向けのコラム執筆の機会を与えて下さった大阪商業大学企画広報課、ティージー・テック及びU・コミュニティホテルそれぞれの担当者の皆様に感謝致します。

なお筆者の玄祖父である野澤九八郎安直(雞一)は、会津藩野沢組野沢原町村北分肝煎職六代目斎藤兵右衛門安頼(内蔵吉)の八男として誕生するが、縁あって京都守護職配下となり土分格に昇進すると共に、斎藤一(藤田五郎)等の新選組隊士や初代会津藩の小鉄・上坂仙吉(仙之助)と義兄弟となっている。本稿が「星亨とその時代」(1・2、川崎勝・広瀬順晴校注、平凡社東洋文庫、一九八四年)の編著者及び星の舎弟としてのみでしか語られることのなかった玄祖父雞一やその仲間たちの活動の一端を伝えることができれば幸いである。